



R2.1.8現在	学級数	生徒数
1 学年	8	303
2 学年	8	297
3 学年	7	271
特別支援	3	17
合 計	26	888

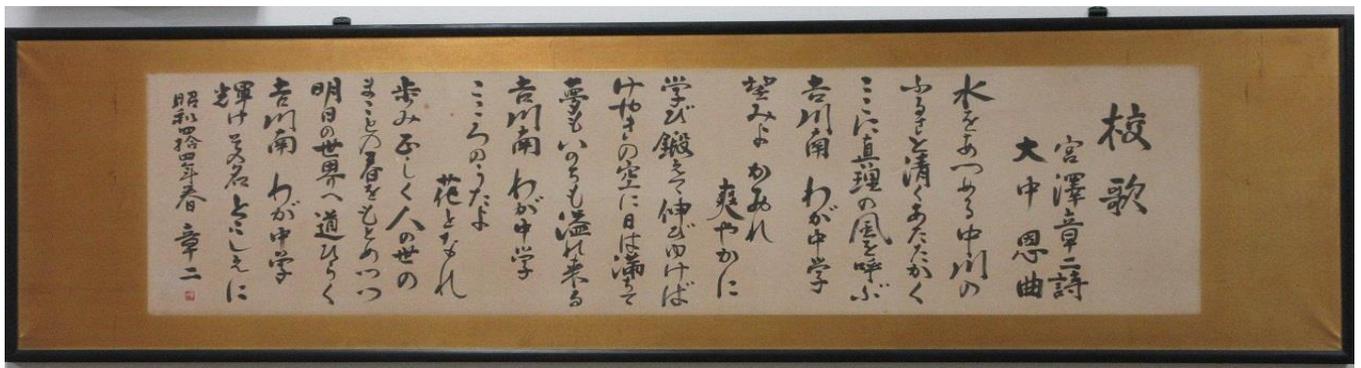
校歌への思い

校長 窪田 和彦

入学式・卒業式など学校での大切な式では、必ず歌う校歌。改めて、生徒諸君に聞きます。南中学校の校歌をどんな想いで歌っていますか。作詞、作曲者名は知っているも、どんな人なのか、どんなことを想い作ってくれたのかなど、校歌のできたいきさは知らないのではないのでしょうか。

校歌の作詞は、宮澤章二先生です。宮沢先生は大正8年、埼玉県羽生市に生まれ、昭和18年、東大文学部美学科を卒業し、戦後4年間、県立不動岡高校で国語教員として熱心に教鞭を執っていました。

昭和44年3月10日に、南中校歌に託した思いを綴った手紙には、次のように書かれています。



吉川南中学校の皆さんへ

宮澤 章二

吉川南中学校のみなさん、私がどんな気持ちで校歌を作詩したか、それを簡単に記してみましょう。

先ず、ふるさとを愛し、母校を大切にしたいという心です。その「心のあたたかさ」が、常に新しい希望を生み、豊かな人間性を育てます。第一節の「ふるさと清く、あたたかく」という言葉は、自然環境の清さ・あたたかさであると同時に、人の心の清さ・あたたかさをも意味します。すべては、そこから始まるのです。

次に、一日一日を真剣に学び、心と体をたゆまず鍛えることの大切さです。第二節に取り上げた「けやき」は、埼玉県の「県の木」ですが、一本一本の樹木でさえ、風に吹かれ雨に打たれながら、一日として生長をやめません。樹木の中に満ち満ちているのは、絶えず伸びようとする強い意志であり、たゆむことのない大きな努力です。私たちが、樹木から感じ取るのは、そういう生き生きとした気迫です。人間もまた同じではありませんか。強い意志を持ち、精一杯の努力を重ねるならば、太陽は必ずほほえみかけてくれるはずで、樹木に絶望がないように、人間にも絶望はないのです。

そして、最後に、人間は決して一人っきりで生きているのではなく、一人一人がすべて社会の一員である以上、私たちは、自分のことだけを考えるのではなく、他人のこと・世の中のことも考えながら、生きていかねばならない、ということです。人間同士の深い結び付き、個人と社会の正しい関係、それをほんとうに教えてくれる所こそ、学校であり、母校であるのです。

以上のような考え方を中心にして、私は吉川南中学校の校歌を作詩いたしました。ですから、皆さんもまた、そういう気持ちで、この校歌を声高く歌ってください。これはもう皆さん自身の歌なのです。皆さんが、折りあるごとに歌って育てて行く歌なのです。

特に、今年卒業される皆さんは、生まれたばかりの校歌を合唱して母校を巣立つ、最初のかたがたです。どうか、この歌を忘れないよう心に刻んで、それぞれの希望に満ちた道へ出発してください。明日の新しい世界を作るのは、あなたがた自身なのです。そして、さまざまな可能性をつつむ二十一世紀は、まさに、若いあなたがたのためにあるのです。

昭和44年3月10日

この南中生しか歌えない校歌。校歌の歌詞の意味をよく考えて、誇りをもって堂々と校歌を歌いましょう。